

2010年8月8日(修正) 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

奈良信さん、バランタイン賞受賞 横浜国際大会の初日

横浜市パシフィコ横浜で開催された第69回国際大会は、8月8日、4日間の会期を終えて、盛り上がりの中に閉幕しました。このことは、区から、あるいは大会実行委員会(HCC)からも詳細があるでしょう。

この大会で東京山手クラブの奈良信さんが、ワイズメン最高の名誉であるハリー・バランタイン賞を受賞しました。

初日、国立国際会議場大ホールで行われた直前国際会長(IPIP)ナイトにおいて、ケビン・カミング(Kevin Cummings)直前会長が発表すると、場内から大きな拍手と歓声が上がりました。登壇した奈良信さんはトレードマークの蝶ネクタイ姿。国際会長が、その多彩な功績を紹介しました。表彰盾が授与されると同時に、バランタイン賞授与式のために急遽編成されたトランペット隊によるワイズ・ファンファーレが響きました。

うながされて、奈良信さんはスピーチをされました。驚きで言葉にならないと言われながら、「anyway, Y'sMen is wonderful!」という10語に満たない短いものでありましたが、その長く、重い功績とともに、ケビン直前会長が思わず頭を低くする説得力がありました。上から下まで耳(?)に余る長広舌が過ぎる最近のワイズメンに対する涼風というべきでありました。

奈良信さんは、お父上の奈良傳さんと二代受賞、地元日本での国際大会の席での受賞でした。

The Harry M. Ballantyne Award は、カナダYMCA 同盟主事、故 Harry M. Ballantyne の名を冠しています。彼は、1922年のワイズメンズクラブ国際協会設立以来、連絡主事としてワイズ

メンズクラブとYMCAの連携のために能力を發揮し、そのことを記念して1957年に賞が設けられ、毎年、ワイズダムに貢献したメンバーが表彰されるワイズメン最高の栄誉とされています。

日本では、これまでに次の方が受賞しています。
(敬称略・クラブ名は受賞時)

- 1966年 奈良 傳(大阪)
- 1982年 鈴木謙介(大阪)
- 1987年 竹内敏朗(熱海グローリー)
- 1995年 田中 真(東京)
- 2002年 三井満壽雄(大阪)
- 2006年 今村 一之(大阪土佐堀)

奈良信さんの横顔

奈良信さんの横顔は、学校法人東京YMCA 学院理事長の徳久俊彦さんが、奈良さんの『キリスト教文化功労賞』受賞の際にまとめられた紹介文を参考にさせていただきました。

* * *

奈良信さんは、1922年、ワイズメンズクラブ国際協会創立の年の誕生です。大阪YMCAの主事であり、日本のワイズメン運動の創始者、奈良傳の長男として、幼少からワイズリングとしてワイズメンクラブの活動を経験しています。

理系大学生として兵役を免れ、太平洋戦争敗戦の2カ月後の1945年10月、いち早く日本全国の学生キリスト者に呼びかけて集会をもち、これがその後の学生キリスト教運動のきっかけとなっています。

1953年に東京山手クラブにチャーターメンバーとして入会、クラブ役員、日本区役員を歴任後、1973年に日本区理事に就任して、成長機運にあった日本のワイズメン運動を鼓舞し、方向性を示

しました。

同時に国際副会長として、ワイズメンズクラブ国際協会史上画期的な出来事であった国際憲法の改定作業に参画して、真の意味でのワイズメンズクラブのグローバル化の道を開き、定着させる役割を果たしています。ジャマイカで行われた国際議会、国際大会においては国際憲法起草のために徹夜で、作業、議論を重ねました。

またアメリカ大陸以外で初めて開催された1975年の熱海国際大会の成功のために心を尽くしました。

1975年、国際憲法を日本区的全ワイズメンズに伝えるとともに、日本区定款起草委員長となり、改定案を策定しました。

1976-1978年には、アジア地域会長に就任。当時、出国が困難であった韓国、フィリピンなどを訪問して、各区指導者と協議して、1997年に『アジア地域ガイドライン (Asian Operation Guideline)』をまとめ上げ、その後のアジア地域発展の基礎を築いたとされています。

ワイズダムにおける卓越した理論家であり、情熱とユーモアをもった語り口、文章は、「奈良ブシ」として、親しまれていることは、ご承知のとおりです。

本年88歳。東京山手クラブの例会には毎月出席するとともに、京都国際大会の際のホームステアの時に行って好評だった童謡を歌う会を18年間続けています。これは現在、各地で盛んな童謡・唱歌の会の源流のひとつと言えます。

YMCA関係では、太平洋戦争後の日本の学生YMCAの復興に尽力しました。日本YMCA同盟委員を1961年から34年間務めました。中でも1972年から4年に及んだ「パリ基準研究委員」に始まる「日本YMCA基本原則」草案の作成委員長としての働きは、彼のYMCAに対する情熱のすべてをぶつけたものと、評価されています。

建築家として、これまで日本各地で約600余の建造物を設計・監理し、その中には50の教会堂と、学校、YMCA施設が含まれています。

1950年代には、日本キリスト教団会堂建築委員会発行の「教会建築図集」に協力し、1985年、発刊の「教会建築」では、日本の戦前戦後の教会建築の歴史と「教会建築の発意から竣工まで」を担当しています。

これらが称えられ、2006年に日本の社会的貢献をしたクリスチャンに贈られる『キリスト教文化功労賞』を受賞しました。

メネット奈良玲子さんは1975-1976年度、日本区メネット事業主任を務めています。

これまでの受賞者群像

バランタイン賞の選考は、国際会長が中心となって直前国際会長、次期国際会長によって、大会の前年度中に行われるそうです。役員が1年任期となっているワイズメンズクラブでは、どうしても数年前に活躍した国際役員に目がいきがちですが、そのような人ばかり選ばれたのでは、面白くもおかしくもありません。

その点、歴代の受賞者には、歴史に基づいた一味違った方がおられ、ワイズの良識を感じます。

鈴木謙介さん(当時大阪)が国際会長として1976年に選んだのは、ジョージ・カイトル(George Keitel・米国)さんでした。彼は、1941-42年、つまり戦前の国際会長です。1972年に発行された『HISTORY OF YSDOM』を執筆し、日本では「常時書イテル」と言われていました。国際会長としての表舞台から去って35年後の受賞でした。

竹内敏朗さん(当時熱海)は、1985年、国際会長として、米国のバーノン・パイク(Vernon Pike)さんとメネットのミリアム・パイク(Miriam Pike)さんを選びました。夫妻は、日本にはお馴染みが深いのですが、パイクは、長くBF事業に関わり、国際BF事業主任を2年、さらに1年を務め、謙虚な人柄から「BFのパイク」と親しまれた名物男でした。竹内さんは、「本当は、メネットが全部やっていたんだよ」と、今でも言われます。そんなことからの異例の夫妻の受

賞でした。

青木一芳国際会長（千葉）は、1995年に「ミスター・エンダウメント」と呼ばれた田中真さん（東京）を選んでいきます。田中さんは、1987-1988年から1995-1996年の8年間に、国際EF事業主任を5年、アジアEF事業主任を3年務めました。日本区とアジア地域ではエンダウメントファンド（EF）の啓蒙と募金促進、国際ではEFトラスティ（管財人）としてEF資産の増強に、情熱を注がれていました。そのため、EFが国際的に広く認知されて、その主目的である国際の特別発展プロジェクトに大きく貢献しました。

1899年生まれで“3世紀を生きたワイズメン”三井満寿雄さん（大阪）は、「ほんま、うまいこと逃げはりますのや」と、クラブ内で言われたとおり、役職は、クラブ会長すら引き受けられませんでした。商家の家訓でもあったのでしょうか。しかし、個人としては、奉仕も寄付も惜しまない方として知られていました。

Historian's View

鈴木田通夫さん（東京山手）は、大学卒業後すぐにワイズメンになり、若くして米国に駐在しました。そのことを知った当時の日本区名誉理事の奈良傳さんが国際本部に連絡してくれて、BF代表として、登録費免除で1965年のカナダ・フレドリックトンの大会に参加しています。ずいぶん、融通のきく時代だったとも言えます。

一事が万事、この頃は国際大会といっても、米国の大会に各国代表が招かれているという印象で、鈴木田さんによれば、後に北欧でリーダーシップを発揮することになるポール・ヨルゲンセン（デンマーク）が、「おれたちは、お客ではないんだぞ」と、大会期間中、怒鳴っていたそうです。

このような米国中心であった国際協会を真の意味で「国際」とする流れが1971年頃から高まり、奈良信さんは、このことに心血を注いだのです。当時は、ワイズの組織基盤が出来ていない国、出国がままならない国が多く、戦前から、組織だ

った活動を行っていた日本区は、国際でも頼りにされていたのです。

奈良信さんのボランティア賞受賞は遅かったという感があります。

前述のとおり日本にワイズメン運動をもたらした、国際的にも頼りにされていた奈良傳さん（大阪）とは親子の関係です。親が校長の場合に、子どもが総代に選ばれにくいようなもので、日本では今さら推薦しにくい別格扱いの雰囲気があったように感じます。今は、昔のことを知らない世代が増えてきて、やはり奈良さんには受賞してもらいたいということになったのでしょうか。

奈良さんは、受賞の知らせを受けて、「わしがやったのは昔の話で、そんなことを知っているモンが、まだ生きとるんか」と、言われたそうです。

「奈良ブシ」とよく言われます。独特の語り口、言葉の選択、言い回しの意外性が、人にそう言わせるのでしょうか。しかし奈良さんは、ワイズの歴史、YMCAの歴史を読み込んで精通され、自分の言葉で語られています。自身のテレもあつてか、それをストレートに出されることはありませんが、このような書生っぽさが、奈良ブシの真髓だと思えます。

今号は、思いがけず「奈良信・特集」となりました。奈良さんの歩みが、ワイズメン運動の歴史を語るものであり、また、新たな人と人との繋がりを生む、よすがとなると判断しました。

前号の「第1読会」とは

8号の「国際議会って何？」にあった「第1読会」の意味を知りたいと、質問をいただきました。深く読んで下さっていることに感謝いたします・

執筆された青木一芳さん（千葉）によりますと、「第1読会（どっかい）」は、最初の読み合わせです。予算案には関心が高く、いろいろ修正案が現れることが予想されるので、議会の初日に、まずこれを行い、その後種々の計画を審議して、最終日にそれらを反映した予算の最終案を第2読会で仕上げるのです」とのことです。